



Frontal lobe-mediated behavioral changes in amyotrophic lateral sclerosis: Are they independent of physical disabilities?

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 浜松医科大学 公開日: 2018-09-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 寺田, 達弘 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/00003422

論文審査の結果の要旨

筋萎縮性側索硬化症 (Amyotrophic lateral sclerosis: ALS) は上位と下位の運動ニューロンが共に障害される進行性神経疾患である。神経心理学的には、ALS に前頭葉機能障害が伴うことは稀ではないことが明らかにされている。しかし、障害が日常生活に即した社会的場面においていかなる行動変化として現れるかについてはまだよく調べられていない。そこで、申請者は、前頭葉機能に関する行動評価尺度として新しく開発された Frontal Systems Behavior Scale (FrSBe) の日本語版を用いて、ALS における前頭葉由来の行動障害の特徴と検出された行動障害に対する身体症状の寄与の有無について詳しく検討した。

孤発性 ALS 症例 24 名 (男性 11 名、女性 13 名) を対象とした。全例とも、明らかな認知症を認めず、自立した日常生活が維持され、言語や指先の動作が保たれ、臨床的に呼吸不全を認めない症例に限定した。さらに、呼吸機能検査が正常で、自覚的抑うつのない症例に限定した。これらの対象者と家族に同意を得て、同じ内容の自己評価版 FrSBe と家族評価版 FrSBe をそれぞれに実施した。

その結果、ALS 発症前の家族評価版 FrSBe の総得点は平均の T 得点の範囲にあった。ALS 発症後の総得点は、発症前と比べ、有意に上昇していた ($p < 0.001$)。下位尺度得点では、アパシーの項目で発症後の有意な上昇が観察され、平均の T 得点の範囲を超えていた。同様に、ALS 発症前の自己評価版 FrSBe の総得点は平均の T 得点の範囲内であったが、発症後の総得点は有意に上昇していた ($p < 0.001$)。下位尺度得点でもアパシーの項目が発症後に有意に上昇していた ($p < 0.001$)。また、ALS 発症後の家族評価版 FrSBe の総得点と ALSFRS、呼吸機能検査、MMSE、SDS のそれぞれの数値との間に有意な相関は認められなかった。

これらの結果から、申請者は、認知症を認めない早期の ALS においても、運動障害や呼吸機能障害では説明できないアパシーを特徴とする前頭葉由来の行動障害が出現すると推論している。

審査委員会では、ALS の行動障害は前頭葉機能障害として対応して行く必要性を初めて示唆した点を高く評価した。

以上により、本論文は博士 (医学) の学位の授与にふさわしいと審査員全員一致で評価した。

論文審査担当者 主査 中原 大一郎
副査 森 則夫 副査 杉山 憲嗣